

(大島郡笠利町喜瀬字サウチ)

**位置と環境**

笠利湾に細長く突き出した打田原半島西岸で、半島の先端に近い崎原砂丘に立地する。海岸に面する標高9.2mの砂丘に形成され、その背後には、急峻な山地をひかえ、砂丘との間に低湿地がひろがり、弥生時代初期の遺跡立地条件に、ぴたり一致する自然条件をそなえたところである。

**調査の経緯**

昭和52年(1977)に笠利町教育委員会が発掘調査をおこなった。

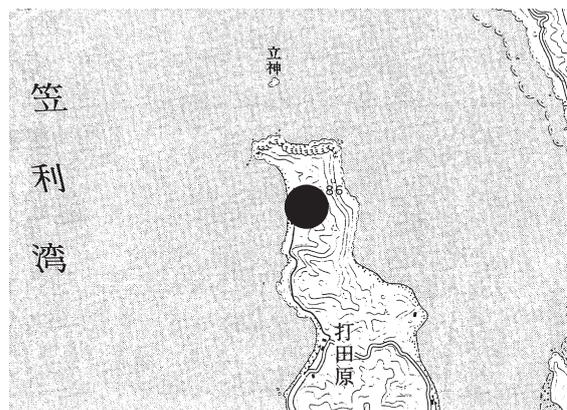
**遺構と遺物**

相互に無遺物層をはさんだ三つの遺物包含層からなっている。下層は面縄西洞式、中層は弥生時代前期・中期、上層は弥生時代後期である。下層は砂丘の内側にある低地に包含層があり、現在の砂丘が成立する以前の汀線に近く、面縄西洞式の遺跡が形成された。この後、砂丘が成立するのにしたがって、生活の場が砂丘へ移動していった。

中層の下部に包含層があり、3.1m×2.5mの楕円形をした竪穴住居跡、なかに珪岩の円礫を配置した土壇、底部にオオツタノハ製貝輪をおさめた土壇が発見された。住居跡からは土製の紡錘車出土した。土器は壺、甕、鉢が出土し、大半が弥生土器そのもので、わずかに地元でつくられたものもふくまれる。

中層の上部には、弥生時代中期初頭および中葉の甕形土器が出土し、くわえて地元でつくられた弥生土器の量が増加する。中期の弥生土器に、地元の文様をほどこしたもの、三日月状の外耳がつくものなどがある。一方、中期の弥生土器に地元のキャリッパー形の土器や兼久式の祖形の土器が共伴する。この時期には、磨製石鏃や、饗養文系の模様を彫った貝札も出土している。周辺からは調査前に多くの人骨も出土しており、この頃の墓があったことも想定できる。

上層では南九州の弥生時代後期終末の土器が若干見られるが、その量は多くはない。これに共伴する地元の土器も定形化が明瞭でない。上層からは羽口



第1図 サウチ遺跡の位置

(フイゴ口) および鉄器の破片が出土しており、この時期に製鉄技術も伝来していることを示している。

石器には磨製石斧・打製石斧・凹石・石錘・磨石・叩き石・礫器などが、貝製品には貝輪・垂飾・貝斧・貝匙・穿孔貝などがある。自然遺物としてイノシシやマダイ・ベラなどの魚骨、サラサバティ・ヤコウガイなどの貝がある。

**特徴**

奄美諸島に弥生文化が定着していたことが明らかになった最初の遺跡である。

**資料の所在**

出土遺物は、笠利町歴史民俗資料館に保管され、一部は展示されている。

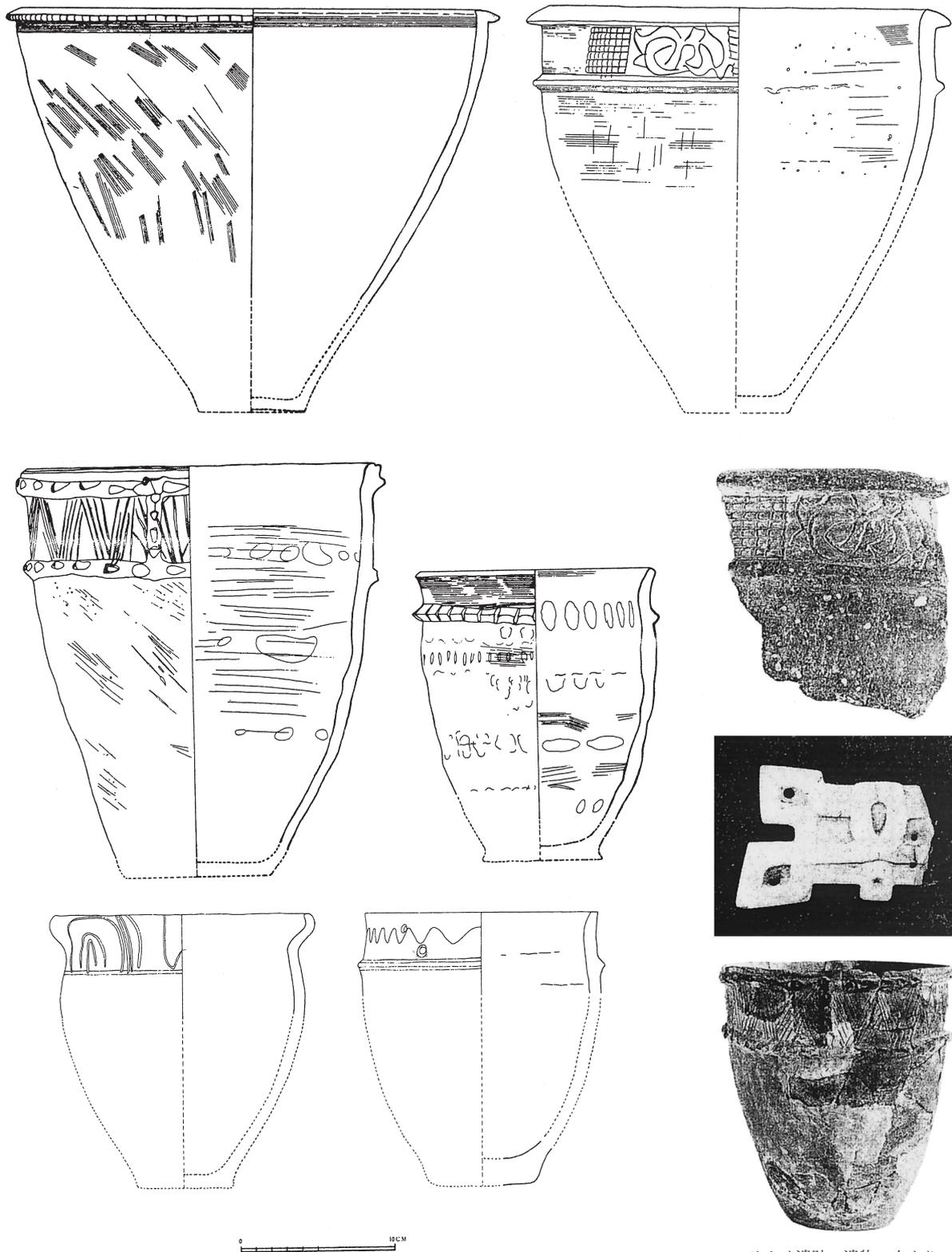
**参考文献**

笠利町教育委員会1978「サウチ遺跡」『笠利町埋蔵文化財発掘調査報告書』1

(河口貞徳)



写真1 サウチ遺跡の弥生時代前期の住居跡



第2図 出土品

サウチ遺跡の遺物。上より  
地元の紋様をつけた弥生土  
器、貝札、面縄西洞式土器